

魅力ある企画展とは？

— 「地域の人材活用と育成」や「来館者層にあわせた展示構成」の工夫 —

ミュージアムパーク茨城県自然博物館博物館 主任学芸主事 中川裕喜

1. はじめに

ミュージアムパーク茨城県自然博物館（以下“当館”）は、資料収集や調査研究だけでなく地域の来館者への自然史学習の拠点となることを目的として1994年11月に開館した。来館者は年間約40万人前後で推移し、小学生以下が40%を占め、休日には30代前後の親世代を中心とした家族連れが目立つ。また、当館は千葉県、埼玉県との県境近くにあり、来館者のおよそ半分が他県からである。さらに、リピーターの占める割合が75%と非常に高くなっている。再来館の理由としては、企画展の観覧を目的とする割合が年々増加し、平成25年度以降は35%を超え、平成27年度には41%となった。これらのことから、当館の企画展が来館者の満足度や期待度が高くなっているとともに、小学生の学習の場として活用されていることが伺える。

本発表では、ここ数年に開催した企画展における「地域の人材の活用や育成」、来館者層に子どもや家族連れが多いことを意識した「展示構成」の工夫について、その成果などを報告する。

2. 第52回企画展

「昆虫大冒険—タケルとケイの不思議な旅—」における 地域の人材活用と継続性をもたせるストーリーづくり

第52回「昆虫大冒険—タケルとケイの不思議な旅—」（以下“昆虫展”）は、2011年7月9日から9月19日に開催し、昆虫の種と生態の多様性を紹介することをねらいとした。

1) ボランティアや地元の研究者の活用

当館には、周辺地域に在住するボランティアが100名ほど在籍し、それぞれが14のチーム（昆虫、植物、化石、イベントなど）に所属し、標本整理やイベント運営の補助などを行っている。昆虫展では「昆虫クイズ」を設け、来館者が解答を書き込んだワークシートの採点をボランティアや地元の高校生などが行った（図1）。活動は全ての開催期間中に行い、64日間に延べ465人のボランティアが2,038.5時間の活動を行った。また、ミニ実験コーナーを設け、週末や祝日を中心にボランティアが主体となって実施するイベントも実施した。これらの活動を通して、ボランティアから「昆虫の勉強になった」との意見や「来館者との交

流が活発にできた」との声があり、接し方などにおいて自身の研修につながったといえる。また、当館がある坂東市の近郊には筑波研究学園都市があり、多くの研究所がある。会期中には、森林総合研究所や農業生物資源研究所などの研究員や地元の大学教授、有識者など8人を講師に招いて、野外施設での観察会や展示室でのミニ実験を行った(図2)。それぞれの専門分野について子どもにもわかりやすい内容での解説があり、多様なテーマでの観察会や解説となった。

2) 継続したストーリーの性ある展示企画の工夫

昆虫展では、親しみやすい展示とするために小学生のタケルと幼稚園児のケイというキャラクターを展示の案内役として設定し、昆虫好きの子どもたちが昆虫ワールドを探検するという構成にした。6年後となる2017年の夏には、成長して中学3年生となったタケルと小学校5年生のケイが再登場して「昆虫の研究」をテーマとした企画展を開催する予定である。このような企画展の続編的な展示構成は当館では初めてであり、6年前に来館した人がどれだけ展示を覚えているか、また継続的な来館者の意識変化などについて検証してみたいと考えている。



図1 ボランティアによる昆虫クイズの採点と解説



図2 地元の研究者による野外移設での観察会

3. 第64回企画展

「くらしの中の動物—嫌われものの本当の姿—」 におけるキャラクターの活用と体験活動の充実

第64回「くらしの中の動物—嫌われものの本当の姿—」(以下“嫌われもの展”)は、2015年10月10日から2016年1月31日に開催した。ハチ、ゴキブリ、ネズミ、ヘビなどの普段は嫌われものとよばれる10種の動物を中心に、知られざる魅力や生態系での役割などを紹介し、人と生き物のつきあい方を考えるきっかけとすることをねらいとした。

1) キャラクターを活用した展示構成の工夫

人によっては見るだけでも嫌悪感をもつ動物を紹介するにあたり、少しでも関心をもって展示を見てもらえるようにするため、擬人化した10のキャラクターを設定した。それぞれのキャラクターには、形態的な特徴をデザインに取り入れ動物の種類がわかるようにするとともに、生態をふまえた性格付けを行うことでそれらの動物の特徴が理解しやすくできるようにした(図3)。また、キャラクターはヒトからの攻撃をどのようにしてかわすかを研究している「ヒト対策研究所」の研究者という設定とし、展示の案内役とした。



図3 ゴキブリ(左)とヒトスジシマカ(右)のキャラクター

来館者に対する「キャラクターはどうだったか？」というアンケートに対して、523の回答があり内訳は【a:大変よかった287、b:よかった200、c:あまりよくなかった30、d:よくなかった6】で、好意的な意見が93%を占めた。また、よせられた意見としては、「嫌われものの生きものを主役に考えることがすばらしい。イラストをアニメ風に行っているのも、どんな人も興味を持ちやすかったと思う。」「身近にいるけど嫌われている生きものに対しても切り口が面白く、多面的なものの見方ができた。」などのキャラクターの設定に対して高評価なものが多く、ねらいがある程度達成できたと考えられる。

2) 実感がもてる体験コーナーや企画の工夫

展示室の中心には子ども向けのプレイコーナーとして、拡大したゴキブリとネズミの捕獲トラップを設置した。このコーナーは「脱出訓練所」と称し、ネズミとゴキブリのコスチュームに着替え、手袋とトラップの床板にマジックテープを利用してひつつくような感覚を得られるものとした(図4)。体験した子どもからは、「ゴキブリの気持ちがわかった」などの意見がよせられた。

また、企画展示室で来館者を集め、外国産ゴキブリや身近に生息するへびの生体のタッチ



図4 プレイコーナーの巨大ゴキブリ捕獲トラップ



図5 展示室で行ったゴキブリタッチングイベント

ング、スズメバチの巣の解体ショーなどを週末や祝日に不定期で行った(図5)。来館者に生体や解体した巣などを触ってもらいながら、職員がそれぞれの生き物の解説を行うことで、親しみがもてるようにするとともに理解が深められることをねらいとした。「イメージが変わった動物は？」というアンケート項目で最も多かったのがゴキブリであり、「多様な種がいるが、害虫とされている種はわずかである」「ペットとして飼育される種があるとは知らなかった」などの理由が多く、職員が直接解説することと体験をともなった活動の効果ではないかと思われる。

4. 第67回企画展「外から運ばれて来た生き物たち — Youはどうして日本へ? —」における漫画を用いた 展示解説と学生の研究発表の場の提供

第67回「外から運ばれて来た生き物たち— Youはどうして日本へ? —」(以下“外来生物展”)は、2016年10月8日から2017年1月29日に開催した。当館では外来生物をテーマにした企画展は初めてであり、身近にいる外来生物の扱い方やその経緯、茨城県の現状などを紹介し、外来生物に対する認識や問題を考えるきっかけとなることをねらいとした。

1) 4コマ漫画を活用した展示解説の工夫

子どもにとってテキストのみの展示解説パネルを読むことは難しく、外来生物という複雑な内容をテキストのみの解説では伝わりにくいであろうと考えられた。そこで、子どもたちにも視覚的にとらえながら容易に読むことができる4コマ漫画を用いて解説することとした。4コマ漫画は展示室のコーナーサインとして13編を配置した(図6)。漫画の内容は、「導入経緯、被害、扱い方、対策の必要性」など解説するテーマのバランスを考え、一通り読めば外来生物やその問題に関する概略を知ることができるように配慮した。来館者への「印象に残った展示物は?(複数回答可)」というアンケートに対して「4コマ漫画」という回答が最も多く(2016年12月末時点)、展示解説で漫画を紙芝居のように用いた際も子どもたちの反応はたいへんよかった。

2) 中高生および大学生などによる研究成果の発表や展示解説の実施

外来生物展では、地域の市民団体やNPO法人などが行っている外来生物対策をとりあげた。そのひとつとして、東京都内および埼玉県内の10校の中高生が外来生物に関する研究や啓発活動を行っている「チームアライグマ」の活動を紹介した。その生徒たちにそれぞれの研究成果や外来生物に関する解説を行ってもらった。発表は展示室内に職員が解説するために設けたレクチャーコーナーで、展示室内の来館者をその場で集めて実施した。会期中の週末や祝日の5日間で5校が参加し、それぞれ午前と午後の1回ずつ5分から10分程度のレク

チャーを3テーマ程度実施した。担当していた教員や生徒からは貴重な発表の機会となり良い経験となったとの声があり、来館者からも中高生の研究発表に感心する意見がよせられた。同様に、当館と協力してアライグマの研究をしている大学生や常設展の大型水槽を管理するアクアワールド茨城県大洗水族館の職員による展示解説も行った。それぞれの発表は手法やテーマが異なり、来館者に対してさまざまな視点で解説をすることができたと考える。



図6 展示室に配置した4コマ漫画の一部



図7 展示室における高校生による研究成果の発表

5. おわりに 一展示制作を通じた人材育成と還元

当館における企画展制作は、展示構成の検討や制作に4～5名の学芸系職員がかかわる。当館の学芸系職員は16名おり、6名の固定職員（博物館学芸員として採用された者）と10名は交流職員（県内の小中高等学校から人事異動で転勤してきた教員）で構成している。固定職員は動物・植物・地学のうち自身の専門とする分野の研究室に所属する。一方、交流職員も固定職員と同様にいずれかの研究室に所属し、ほぼ同様の業務を担当し、4～6年の博物館勤務のち学校現場に戻る。

当館では年に3回の企画展を開催しており、学芸系職員は概ね1年に1回はスタッフとして展示制作に携わることとなる。また、職員の人数により、4～5年に1回ほど企画展のチーフが巡ってくるので、ほとんどの交流職員は在籍中に1度だけチーフをつとめることとなる。チーフは、担当する企画展のテーマが決定してから概ね3年の準備期間を通して、展示全体のコンセプトの考案、ポスターおよび展示解説書の制作、予算の調整、イベントの立案、展示工事を担当する委託業者との折衝などをスタッフの中心となって行い、自分の思いを込めたものに仕上げている。交流職員にとっては、資料調査・展示物の検討・展示解説書の執筆など学校現場では経験したことのない業務に戸惑うことが多々あるが、得られることも多い。例えば、展示テーマが絞られた企画展に携わることでテーマにかかる専門的知識、資料調査による外部機関とのつながり、展示の構想を練る創造力や企画力、対人関係の調整力などである。これらのことから、企画展の制作過程は我々にとって人材育成の場のひとつであり、さまざまな経験をした交流職員が学校現場に戻り地域の児童や生徒への教育活動に還元できることは大きな財産であると考えている。

6. 引用文献

- 稲村憲慶 . 2000. ミュージアムパーク茨城県自然博物館入館者動向の変化—アンケート結果から開館 5 周年を振り返る—. 茨城県自然博物館研究報告 , (3): 67-71.
- 潮田好弘 . 2016. 「くらしの中の動物」展におけるキャラクターの効果 . 全科協ニュース , 46(2): 2-4.
- 大森伸一 . 1998. ミュージアムパーク茨城県自然博物館の来館者の意識と動向—来館者のアンケート結果から—. 茨城県自然博物館研究報告 , (1): 145-148.
- 小幡和男 . 2016. ミュージアムパーク茨城県自然博物館の企画展について . 博物館研究 . (581): 26-29.
- 鈴木 肇・小幡和男 . 2015. ミュージアムパーク茨城県自然博物館の来館者の意識と動向—アンケート調査からみる 20 年の軌跡—. 茨城県自然博物館研究報告 , (18): 119-126.
- 戸塚佳代子 . 2006. ミュージアムパーク茨城県自然博物館の来館者の意識と動向—来館者のアンケートからみる 10 年の軌跡—. 茨城県自然博物館研究報告 , (9): 89-94.
- 中山 豊・久松正樹・松原洋介・仙田 満 . 2002. ミュージアムパーク茨城県自然博物館における展示利用行動調査 . 茨城県自然博物館研究報告 , (5): 69-79.
- 久松正樹・小泉直孝・山崎晃司・湯本勝洋・石田容之 . 2012. ミュージアムパーク茨城県自然博物館第 52 回企画展「昆虫大冒険—タケルとケイの不思議な旅—」の記録 . 茨城県自然博物館研究報告 , (15): 105 – 113.